



# つるがしま里山サポートクラブ 通信

第9号  
2022.10.01  
発行者  
小澤邦彦  
編集者  
杉山行汪

## グリーンパークでの活動紹介

副代表 小沼 英二

鶴ヶ島グリーンパークは 2021 年4月に開園しましたので1年半が経ちました。グリーンパーク内の太田ヶ谷の森は 5.6ha と市内に残された大きな里山・樹林地であり、これからどのような森にしていくのか試行錯誤の連続が続いています。この間を振り返ると次の経過がありました。

まず、森の運営組織を立ち上げました。「太田ヶ谷の森ランドワーク」という名称で地元自治会（フラワーフレンズ）・支え合い協議会（サザン）・環境団体（源流の会、自然を守る会、里山サポートクラブ）・市役所都市計画課等で構成され、様々な森に関連する課題や問題点について相談・協議を進めています。（特に森内のゾーニングや役割分担、植樹活動等）

今までのランドワークの主な活動実績は、開園時の植樹祭、森内の大谷川へのホテル放虫（2回）、子どもたちを中心とした里山体験会、市制 30 周年記念植樹、タケノコ掘り体験会、定期的な草刈り等を実施しています。

また、上記各団体の個別活動として、フラワーフレンズがヒマワリ・コキア等の植樹、源流の会はクヌギ・コナラなどの植樹、当クラブは小彼岸桜 84 本、クヌギ・コナラ等 140 本を植樹しました。

今後の森周辺の状況変化として、圏央鶴ヶ島 IC の東側出口開通（2023 年度予定）、森の東側に隣接する埼玉県ロボティックセンターの開所（2026 年度予定）、森の南面に隣接する企業の進出等が考えられます。どのような影響が森にあるのか現時点では未知数です。一方、2022 年 5 月に埼玉県が実施した森の環境調査の中でホンドキツネの定点写真観察があり、1か月の間に 13 例も映っていました。森の豊かさが証明されており、この貴重な森を改めて育んでいかなければと再確認した事例でした。

## 里山で身体とこころの健康を

笹崎 雅弘

「里山」とはなんとステキな響きだろうか。ほのかな郷愁の想いが漂う。里山とは、人が関わることでつくりあげられた自然という意味とのことだが、「人の生活する場」と「自然」との境にある、「人と自然が共生する場」ともいえないだろうか。

かつてはありふれた風景であったものが、「都市化」が進むことで急速に失われてきている。そんな風景を守っていく活動をしているのが「つるがしま里山サポートクラブ」

この活動のステキなところは、「環境保全活動」というより、「人と自然の交流活動」といえるところ。家族で楽しめる体験プログラムが満載。里山の恵みをいただいて、家族で楽しむことが、里山の自然と文化を次の世代に伝えていくことになると思います。

私は、川越市在住で、家族で「整体院」をやっていて、セルフケアを基本にした健康管理をお伝えしています。なるべく「薬」などに頼りすぎない、ナチュラルなものを使い、昔ながらの「おばあちゃんの知恵」ともいえる植物の力を活用しています。身体の「不調」を感じている人たちが、もっと自然に触れる機会をもつことで、「身体とこころの健康」を手に入れることができるかと日々痛感しています。

縁あって里山サポートクラブの仲間となりました。なかなか参加できないことが多いのですが、この素晴らしい活動と「里山の自然と文化」を次世代に伝えていきたいと思っています。



## 7月～9月の主な活動

毎年行っている藤小学校の自然体験学習は今年は森を維持する活動の紹介を行いました。機械作業、伐採作業を実演し、樹高 20m の枯れ木を倒した時、地響きに歓声が上がりました。

会員親睦 BBQ は朝の台風情報では終日雨模様でしたが次第に上がるとの読みで決行、何とか持ち堪え、楽しく病氣自慢話に花が咲きました。

太田ヶ谷の森での里山体験会は当日は曇天の日和でしたが前日までの水害の影響で参加者数は 1 桁でした。コロナ禍の影響もあったことでしょう。

藤金の森での里山体験会はコロナ禍とはいえ健闘した参加者数でした。

ボランティア体験会を兼ねての里山整備作業は多くの会員の参加で順調に進みましたがボランティアの参加は低調。これもコロナ禍のせいでしょうか。

里山を散策すると樹木の名前を知りたくなります。簡単な説明を添えた説明板を製作しました。丸太を二つ割りしたベンチの製作も進めています。これらを順次森に設置していきます。



## 7月～9月 活動実施

- 7/01, 08, 9/06 藤小学校自然体験学習
- 7/13(水) 会員親睦バーベキュー
- 7/16(土) 太田ヶ谷の森里山体験会
- 7/23(土) ボランティア体験会 in 五味ヶ谷森
- 8/06(土) ボランティア体験会 in 高倉の森
- 8/20(土) ボランティア体験会 in 藤金の森
- 8/24(水) 木作業
- 9/03(土) 藤金の森里山体験会
- 9/14(水) 逆木倉庫清掃
- 9/25(日) 高倉の森説明会
- 9/29(土) アール飯盛川清掃&魚取り

## 10月～12月 活動計画

- 10/01(土) 毛呂山プレーパーク支援
- 10/06(木) 栄小学校自然体験学習
- 10/15(土) 太田ヶ谷市民の森整備
- 10/16(日) 大谷川クリーン大作戦
- 10/23(日) 上広子供会里山体験会支援
- 10/29(土) につさいの森プレーパーク支援
- 11/05(土) 五味ヶ谷市民の森整備
- 11/12(土) 里山体験会 in 五味ヶ谷の森
- 11/23(日) 運動公園清掃・焼き芋・芋煮会
- 11/26(土) 太田ヶ谷市民の森整備
- 12/07(水) 五味ヶ谷市民の森整備
- 12/17(土) 太田ヶ谷の森整備

## 主力機械・ハンマーナイフモアの修理

大森 一史

里山サポートクラブの主力機械ハンマーナイフモアは1メートルの幅で草を刈る大形の草刈り機です。その威力はエンジン刈り払い機の何十倍もの仕事を行います。それ故、使用状態も過酷となるので、写真1のようにボディは穴だらけになってしまいました。

修理方法は鉄板を張り替え溶接となるのですが、皆さんに壊れてしまう前提で了解を頂き、考えた方法は木工用ボンドです。

水性で値段も安く大量に使え、鉄(ボンド)鉄を挟んで固定すれば固着する現象は解っていたので、実施しました。先ず、機械内側の清掃を行い、大量の木工用ボンドを塗ります。(写真2)

次に、鉄板(0.8mm×600mm×800mm)を内側に入れ、ボルトナットで固定します。(写真3)

鉄帯は補強のために取付、外側に白く飛び出したボンドは乾燥後に透明になります。

仕上げは緑色の塗料を塗り、これで修理完了です。(写真4)

修理から1年半経過しましたが順調に稼働しています。



梅雨の晴れ間、池尻池側から羊歯を踏み分け明るく開けた広場へと出た。「高倉うきうき市民の森」だという。広場には木のテーブルやベンチがあり、子ども達や里山サポートクラブ、ボランティアの方々が集まっていた。前日の雨で飯盛の小川はさらさらと流れている。先ず目についたのはクヌギの枝から何本ものロープが垂れ下がっていたことだ。ここはツリーイングの場所、子どもたちはヘルメット姿だ。体はハーネスで固定されている。

大樹より気根のごときロープ垂れ児らは一步と樹へ上りゆく

私たちが楽しもうと童心に返り参加することに。緑まぶしき中にカラフルなハンモックが目に入った。私の重さでも大丈夫だそう。

手の平に寝るがごときにハンモックみどり降りたる森に揺られて

次はつなわたり。木から木へ渡された上下二本のロープにハーネスをつけて挑む。

木から木へバンザイのごと綱にぎり横へ横へと眺めつつゆく

つり橋は怖い、ここは大地の緑の上だ。木々を眺めつつ進んだ。

小川では子ども達がアミを手で水遊びをしている。小さなエビが取れたと男の子が見せてくれた。小川の木橋を渡り、「おかねが井戸」の傍らに踏みしだかれた路を進んだ。突如、大きな樅の木が現れた。コナラやクヌギのどんぐりや秋のカラスうりの実でビッグツリーを拵えたらすてきだろうと想像する。奥へと入ると大ケヤキの太い幹に出会った。樹齡を感じさせる厳かさがあつた。この森を見守ってきたのだ。後日訪ねると、藪ミョウガの花が咲き、セミが鳴き始めていた。鳥の鳴き声もする。



樹の下に花茎伸ばす藪みょうが白き小さき花すがすがし

森はボランティアにより整えられ、四季折々に誰でも楽しむことができる。

高倉の森の息吹を身に浴びて木洩れ日させるベンチに憩う

(つるがしま短歌クラブ会員)

6月11日(土)、前日は一日中雨模様で天候に気を揉みながら当日を迎える。朝は曇り空ではあつたがその後快晴となり気温、湿度共に高かつた。高倉市民の森に10時に中央広場に集合。各種プログラムと注意点の説明が有りました。参加者の体験開始です。見廻すと目の前にカラフルなハンモックが揺れ、歓声に引き寄せられて近づいた。身近で目にしたのは初めてで、ましてや乗ったこともないので、眺めていたがその私が初体験です。低い位置の設定ではあつたが乗り降りにはけっこう難しかった。木々の間から見える空の青さが澄んで揺れていた。ツリーイングや水遊びに興ずる子ども等の元気な姿もエネルギーの補充になりました。前日の雨で草木や地面も湿っており滑らぬように足元に注意しながら森の中を散策した。非日常のひとつときを満喫して元気を貰いました。感謝の一日でした。

高倉の市民の森でハンモック揺られつゝ見し空の眩しき

稀なるも森の散策歩数量余裕で今日は目標クリア

つるがしま短歌クラブ会員)

全国一の広さ（市民の森一人）を誇る鶴ヶ島市の「市民の森」を我がクラブは過去 20 年間にわたって開拓し、整備し、保全に携わってきました。身の丈を超える篠、藪を草刈、間伐、枯れ木の伐採、ハンマーナイフでの下草刈りをしてきました。今日では、蛍が飛び交い、見通しのよくなった森を多くの市民が楽しんでます。しかしながら、ここ数年間、会員の高齢化とともにクラブ活動や年間行事にマンネリ化が目立つようになり、会員増も頭打ちで、活動に支障が懸念されつつあります。まさに今、我がクラブの改革と立て直しが求められています。

周りを取り巻く環境の変化にも著しいものがあり、地球温暖化や気候変動、砂漠化、廃プラ、省エネ、再生エネなど大きく民の意識が変わり、更なる環境保全や、温暖化防止策が必要とされている状況です。この中で、ボランティア活動を行っている我がクラブが世界変動に対応した形でどのように社会貢献できるか、存在価値を高めていけるのかを見直す時期に来ていると感じます。

定款では、環境保全、子どもの健全育成を通じ良好な樹林地を次世代に継承することなどが記載されています。これを踏まえ、活動の目的は SCGs（持続可能な開発目標）を基本に考え、子どもたちに健全なる精神の育成と、きれいな森を次世代に残し、その維持管理も引き継いでもらうべく各団体に協力を要請し、森の効用と持続可能な森をどう育成していくかを課題としていくことが必要だと考えます。

地球環境改善のために里山の活動を通して社会に貢献をする仕組みを作っていきたい。戦争、難民、コロナ、雇用、景気、飢餓などの世界平和問題に対しても、その動向に注視することが大切ではないでしょうか。

このような困難な時期だからこそ、いろいろなイベントを企画し、子どもたちが、高齢者がこの危機的な環境に気づき、一つでも自分にできることから始めるような気持ちを持てるように現場を、行動を指し示すことが大切であると思います。カーボンオフセットでは、自分が使った炭素は自分が埋め合わせをする。植林もその一つ、森の再生が、きれいな地球を守っていくことになるのです。

森を歩いてみましょう。自然に触れ合い、土の匂い、鳥のさえずり、木漏れ日、葉っぱを踏む音や葉擦れの音が、私たちの五感を通して、体を健やかに、心を癒してくれます。蝉の音が響く猛暑日でも森の中は涼しい空間でしょう。かけがえのないこの森を継承しなければなりません。

森でしかできないこと、森を楽しむ、森で趣向を変えてみる。子どもたちには野外塾、植樹、水遊び、ツリーイングなど、市民には伐採、清掃、機械を使った整備、野外コンサート、野外太極拳など、企業向けに新人研修プログラム、キャンプ、清掃、整備体験、植樹などを企画していきたい。

森をもっと活用するために、森をきれいにするために、森をもっと大きくするために。

次世代にきれいな森を残すために、きれいな地球を残すために！



最初鶴ヶ島の希少植物について依頼されましたが、今の私に市内の希少植物全般について語る力量はありませんので最近のトピックスとして鶴ヶ島グリーンパーク内の「太田ヶ谷の森」についての話をします。

鶴ヶ島グリーンパークは農業大学校跡地に2021年4月にオープンし、今年2年目になります。農業大跡地に工業団地造成する際に、県による環境影響評価が行われ、「保存すべき種（しゅ）」として、9種の希少植物が確認されました。これらについては緑地として残された「太田ヶ谷の森」に移植するなど、県による環境保全措置が実施されています。また追跡調査が行われ、必要に応じて生育地の草刈なども行われています。またその後、太田ヶ谷の森に2種の希少植物が発見され、これらについても調査がされています。今回はその中からカリガネソウ、ミゾコウジュ、クチナシグサの3種について紹介したいと思います。

**カリガネソウ**（埼玉県絶滅危惧IB類） 開花は7月末か8月。上に向かって長く突き出た雄しべが特徴的で、雁（かり）の姿を思わせることから名がついたと言われます。工場用地内に見つかったもので、県による環境保全措置として太田ヶ谷の森に移植されました。私はかつて群馬県内の谷川連峰中腹のブナ林や、海岸に近い神奈川県横須賀市内で見ることがあります。いずれも半日陰の環境なのに対し、移植先は日当たりの良い場所なので、うまく育つか心配でしたが順調に生育し、昨年、今年と多くの花をつけています。このように生育環境の幅が非常に広い植物と思われます。にもかかわらず埼玉県内で減少しているのは土地造成や山林伐採、植林などが原因とされています。カリガネソウ(2021.7.29)  
大谷川源流の会では種（タネ）を採取して苗を育て、太田ヶ谷の森に植栽する活動を始めています。



**②ミゾコウジュ**（埼玉県準絶滅危惧、環境省準絶滅危惧）

造成後に県の調査とともに源流の会の調査でもピオトープ近くの草地で発見されました。湿った草地や裸地に生育し、4～5月にシソに似た薄紫の花をつけます。土地造成や湿地開発などにより減少しているとされていますが、背の高い草との競争や、自然の遷移によるところも大きいと考えています。生育地はセイタカアワダチソウやコセンダングサなどの外来種が幅をきかせていて、このままではそれらに負けてしまう可能性が高いですので、草刈りをしてロープで囲っています。



ミゾコウジュ(2022.5.11)

**③クチナシグサ**（埼玉県準絶滅危惧） 4月から5月に白から淡紅色の唇形の花を咲かせます。

萼（がく）に包まれた果実がクチナシの実に似ていることからこの名があります。環境影響評価の際、工場用地で確認され、太田ヶ谷の森の林縁部に移植されました。しかし昨年以後、確認されていません。半寄生植物で、イネ科植物に依存するため、移植は難しいとされています。ところが今年、源流の会の調査で太田ヶ谷の森の中に自生するクチナシグサを10株以上確認しました。雑木林の管理放棄などにより減少しているとされ、源流の会では生育場所に支柱を立て、刈払いなどの管理を行っていく予定です。



クチナシソウ(2022.5.11)

(鶴ヶ島の自然を守る会会員)

今年の蛍の季節は終了しましたが、2022年の蛍見学の経過を報告します。

- 蛍見学期間 : 5月20日～6月末
- 蛍見学時間 : 19時30分～21時
- 蛍見学日数 : 11日間
- 蛍見学場所 : 延19か所

## ◇高倉飯盛川（ゲンジホタル）

- ・2010年より毎年出ており、多い時は60匹ほど見ることができ、飯盛川に定着していました。
- ・2020年に20匹ほどと少なくなり、2021年には全く見られず、絶滅したのではと心配しました。
- ・2022年5月28日、10匹ほど見ることができ、絶滅の危惧は払拭できました。
- ・5年前頃からの現象だが、蛍の見られる場所が高倉市民の森の広場近くの橋周辺から毎年徐々に下流方面に移動しており、今年は池尻池近くの橋の下流しか出ていなかった。
- 蛍の下流への移動理由が不明であるが、これ以上の下流への移動は池尻池の下流には今まで蛍は出ていないことから、高倉では見られなくなるのではと危惧している。

## ◇東大谷川（ヘイケホタル）

- ・2021年に開園した鶴ヶ島グリーンパーク内の太田ヶ谷の森を源流としている東大谷川（逆木の池周辺を源流としている大谷川を西大谷川と区分して呼称する。）に蛍が見られるようホタルを飼育している専門家の協力を得て蛍の幼虫の放虫を2021年と今年の4月にイベントとして実施しました。
- ・2年目の今年は、幼虫650匹と大量に放虫したが、見られたのは8匹ほどが点滅しているだけで、飛翔している蛍は少なかった。
- ・5月11日、放虫会に参加した脚折の子ども会の30人と西児童館のエコクラブの子どもたちに数が少なかったが、蛍を見ることができました。

## ◇坂戸市高麗川万年橋下（ゲンジホタル）

- ・鶴ヶ島周辺ではこの場所が毎年安定的に見ることができる。

## ◇毛呂山越辺川支流（ゲンジホタル）

- ・毛呂山の方の情報を得て、3か所（大高取山麓の虚空蔵尊近く、町役場南のあけぼの幼稚園北側、山根六角塔婆近く）を見に行った。
- ・チラホラではあったが、3カ所とも見ることができた。
- ・虚空蔵尊近くで蛍を探しているとき、遠くから地響きがあり、何かとよく見ると鹿が群れを成して疾走しているのを目撃することができた。近くのさくら公園に桜新芽の採取に行ったときに地元の方から鹿の食害があると聞いていたが、実感することができた。

※ 蛍を初めてみる子どもや大人にも、蛍の淡い光は、自然の美しさ、神秘さ、面白さを感じさせるといいます。また、蛍が生育できる自然環境は貴重な悠久な自然が残っている場所でもあり、特に子どもたちにとって自分の故郷の誇りになるものとなります。

今後とも蛍の光を追いかけていきたいと思っています。



減少する里山の保全を進めるためには、市民の皆さんの里山に対する関心を高めることが大切と考え、将来の大人である子ども達に、里山を体験してもらい、森に興味を持ってもらうことを通じて、森の大切さを学ぶ事を目的に子ども達の自然体験活動に取り組んで来ました。

市内の小学校や中学校に「つるがしま里山サポートクラブ」の紹介や里山の紹介をしてきました。市内には多くの樹林地がありますがほとんどが立ち入りが出来ない森です。一方、市民の森は地主さんの協力により市民に公開されている森です。

その市民の森の一つの藤金市民の森では、2016年に藤小学校の自然学習を実施したことを契機に2018年から藤小学校の自然体験活動を継続的に取り組んで来ました。

最初に取り組んだ子ども達は、もう高校生になっているはずですが。

子ども達は、森の中で、走り回り、生き生きと動き回っています。虫がいる、へびだ!!、等自然と接することにより、沢山の発見や体験をしています。このような身近な「森」を守りたいという思いです。



森林を守るためには、知ってもらいたいことがあります。木や森林の役割や森で起きている問題、そしてこの先このままではどうなってしまうのか。もっと木や森林を知ってもらう事により、もっともっと木や森を身近に感じて欲しいと思っています。

森に興味を持ってもらう事により、木はどのように生きているのか、どんな生き物が棲んでいるのか、なぜ、森は涼しいのか、なぜ、地球温暖化を防ぐ役割があるのか、なぜ、山崩れや台風などの災害から守る事が出来るのか、どれくらいの水が蓄えられるのか、そしてなぜ、木材など色々な資材を生み出すのか等など、沢山の疑問を持ってもらいたいと思っています。



森が与えてくれる数々の興味、疑問を知るために、子ども達が自ら調べ、発見していくことが喜びになってほしいとも思っています。自然を体験する場として市民の森を通して、「森を守っていくことが大切」である事を知ってほしいと思っています。

こんな思いが、少しでも子ども達に伝わればと里山の保全活動に取り組んでいるところです。

(前号の続き)

それでも棒が円筒状で空洞になっているより、中身があって詰まっているほうが折れにくいと思われるかもしれませんが。そこで丸棒が折れる様子を見ると、一番よく伸びた遠い部分の表面の伸びが、ある限界を超えると突然そこに割れ目が入って折れます。このとき、割れ目(亀裂)はおおむね棒の内部に向かって瞬間的に進み、棒は折れてしまうというわけです。したがって、棒の折れる運命は棒の表面に亀裂が入るということで決まってしまう、棒が円筒状であるか中身が詰まっているかはほとんど関係がありません。作りが円筒状であることは、中身が詰まっているより物が少なくて済みますから、植物としては成長が速くなるということもありますね。これが「雨後の筍」のゆえんでしょう。竹の成長が非常に速いので、ぼやぼやしていると、タケノコが成長しすぎて食べられなくなるので、チャンスを逃さないようにしなければなりません。

### 繊維状であることの利点

竹はしなやかであると言います。「しなやかさ」とは(1)大きく曲げても折れず、柔らかくて丈夫なことと、(2)力を加えて変形したものが、力を除くと元に戻ることを兼ね備えた性質を言います。柔らかいけど変形したら元に戻らない粘土や、変形しても元に戻るけど硬すぎるガラスなどはしなやかとは言えません。陸上競技の棒高跳びなどを見ていると、それに使われるグラスファイバーがいかにしなやかであるかは一目瞭然ですね。グラスファイバーのしなやかさは、もちろん、その材質が繊維(ファイバー)状だからです。したがって、ほかの木々と比べて極端に繊維状である竹も、非常にしなやかであるということが出来ます。まだグラスファイバーがなかったころ、棒高跳びに竹が使われていたのも、むべなるかなです。

### 節があることの意味

繊維質の素材には繊維同士のつながりが弱いという欠点があります。したがって、繊維質のものでパイプを作ると、曲げたときにぼきっと折れないで、ぐしゃっと曲がるか、縦方向に裂けるということが起きてしまいます。円筒状で繊維質の竹は、この欠点を避けるために、進化の過程で円筒に適当な間隔で節を入れるという、素晴らしい工夫をしました。適当な間隔で節を入れることで、縦方向の繊維を横に束ねて、横方向の弱さをカバーしているのですね。もちろん、このような工夫は竹に限ったことではなく、雑草などでよく見かけられます。ツクシンボウなどはその典型例です。

竹は節を持つということで、グラスファイバーほどのしなやかさを失っていますが、素材としての強度が大幅に増しているということが出来ます。それでも雪国育ちの私は、重たい雪をかぶった竹が単に折れるというより、ぐしゃっと裂けて折れ曲がっているのをよく見かけたものです。

### まとめ

以上のように、竹は円筒状、繊維質で節があるという特徴があり、そのために軽くてしなやかな素晴らしい自然素材ということが出来ます。そんな竹もこれまでのところプラスチックにすっかり追いやられています。単に安価で便利だと考えてプラスチックを石油から作り、環境に配慮することなく使い捨てにする限り、プラスチックに将来はありません。これからは少々の不便は我慢しつつ、持続可能な社会を目指さなければならないことを考えると、竹の利点をもう一度見直す時期に来ているのではないのでしょうか。何しろ、ほんの50年前までは、プラスチックなど全くなくても、竹などの自然素材をごく普通に使ってあまり不便とも思わずに生活していたのですから。

### 編集後記

ロシアのウクライナ侵攻をきっかけに世界経済の混乱、エネルギー価格の高騰、権威主義国家の跋扈等世界の向かう方向は時として暗澹たる思いになります。この間に双方の軍人、国民は命を落とし未来を見失いかけています。双方が放つ砲弾により失われる資源と発生する二酸化炭素は人類の行く末を暗示させます。それでも未来に希望を灯す活動は様々な人々で繰り広げられています。私たちも未来の子供たちに何が出来るか取り組んでいます。一緒に汗を流しませんか。